
下らない会話 午前の部

腐れ大学生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下らない会話 午前の部

【著者名】

Z6329Z

【作者名】

腐れ大学生

【あらすじ】

待つっていた少年と待たせた少女が下らない会話をする話。午前の部。

(前書き)

この作品を読む前に拙作「馬鹿な会話」をお読みいただくと、よりスマートに話が理解できると信じています。

さて、今日は日曜日。いわゆるサンデーだ。

本日はお日柄もよく、大変ショッピング日和であらせられる。

時刻は九時五十分。親友との待ち合わせ時間には十分間に合いそう。

彼と出かけるときはいつも最寄りの公園を集合場所にしてくる。正直その公園へ行くよりもお互いの家の方が近いんだけど、そこは暗黙の了解というやつだ。

目的の公園は住宅街の一角にある。昼過ぎになると親子連れで埋め尽くされるのだが、今は午前だけあつて人影はまばらなようだ。白のタンクトップに青のハーフパンツ姿でランニングをしているお兄さん、よれよれのグレーのスースを着てベンチでため息をついているおじさん、黒の燕尾服でビシツと決めて手に余るほどの中つ赤な薔薇の花束を抱えている変な人、砂場で首から上だけ出して埋まっている美人なお姉さん（何故か不敵な笑みを浮かべている）。

「待っていたよ、マイスウイートハーハー」

時間はもうすぐ十時にならうかといつていい。こんなに可愛い女

の子を待たせるたなんて、男としての心構えかなつて、いなし。

「おいおい、いきなり無視とは手厳しいな。薔薇の花が気に入らなかつたのかい？ でも僕の気持ちを君に伝えるにはこの花しかないと思つたのさ。何故かつて？」

大体あいつはいつもいつも厭味つたらしいんだ。私がちょっと間違えたこと言つたらすぐに上げ足とつて馬鹿にするんだから。

何か腹立つてきた。よく考えたら何であんなやつと一人で出かけな
きやならぬ——ふざ。

そんなことするくらいならまだカブトムシの散歩でもしてた方が

有意義だ。そのためにはまずカブトムシを手に入れないとね、うん。クヌギの木のある森を探しに行こう。
わたしはげんじつからにげだした！

「待て！ 何故逃げる！」

しかしまわりこまれてしまつた！

人生初の不審者とのエンカウントだ。嫌が心にも鼓動が高鳴る（恐怖で）。

「放せえ！ 私は森へと還るんだ！」

「落ち着け、もののけの姫。そなたは美しい」

「すみません、いや、もう本当に勘弁してくれませんか？ メールの件なら謝りますから。土下座とか辞さない覚悟ですから。だから半径五キロ以内に近寄らないで」

「あれ、おかしいな。こんなにも君が近くにいるのに何故か距離を感じるぞ」

「ぐすつ、ひぐ……」

「あれ、舞菜さん？ ひょつとして泣いてます？」

そりや燕尾服着た変態に追いかけられた日には誰だつて泣くわ。私はこんな奴知らない。私の親友は薔薇の花束を携えて甘い言葉を囁くようなやつじゃない。

私が本気で泣きだしたことにより慌てた変態執事は、「着替えてくる」とだけ言い残して公園から駆け去つて行つた。

ふと砂場の方を見ると、お姉さんが心配そうにこちらを見つめてくれている。なんだか申し訳なくなつたので馬鹿が置いて行つた薔薇の花束を砂場にお供えしてみた。お姉さんは優しく微笑んでくれた。

仕切り直し。

十分程度で公園に戻つて来た親友は、青のケミカルウォッシュジーンズに灰色のパーカーと至極無難な格好をしてきた。

とりあえず非難の意を込めた烈火のごとき眼差しを向けると、彼

は恥ずかしげに頬を搔いた。

私は容赦なく、判決を言い渡す裁判長のよつた態度で彼に詰つ。

「弁解を聞こうか」

「今朝の仕返しのつもりでやつた。後悔はしていない」

「朝の仕返しのつもりでやつた。後悔はしていない」
平然とした顔で無反省を宣言する眼鏡男子。頭がおかしいのだろうか。

「そこはしておけよ糞眼鏡。レンズ抜いて伊達眼鏡にしてやろうか」「眼鏡は関係ないだろうが！ 指一本でも触れたらぶつ飛ばすぞ！」「ええ……沸点の低さがエーテル並みだよ……。どんだけ眼鏡の優先度高いの……」

「ふん、非メガネコーザーにはわかるまい」

「へい、その眼鏡くいつてするのやめる。この眼鏡弱者が」
別にすれてもいらない眼鏡を得意げにくいつてするメガネコーザー。
世の中にはこの動作が好きだと言う女の子もいるらしいが、私は大嫌いだ。

彼は私を馬鹿にする前によく眼鏡くいつてするから、この動作を見ると条件反射で馬鹿にされていくように感じるのかもしれない。

「人を情報弱者みたいに言うんじゃない。ロストアイと呼べ」

「超かっこいい！」

オーパーツっぽい響きだ。何かビームとか出そう。ちなみに私は親友からノーミントーフという一つ名でよく呼ばれる。意味はよくわからないがミントーフという響きがおいしそうなので個人的に気に入っている。

「大体僕の眼球は弱くなんかないぞ。むしろ強い」

どうやら親友はまだボケ倒す構えのようだ。発言が要領を得ない。だがこの私がいつまでも大人しく突っ込んでいると思うなよ。ボケ界のプリマドンナとは私のことだ。

「えー、本当ですか。私の、眼球がたくましい人大好きなんですね。ちょっと触つてみてもいいですか」

「眼球たくましい！？ そのノリで触つていいのは腹筋とかーの腕

だけだ！」

「いいじゃん、一個あるんだから一個ぐらい。ぶちゅつ、てれ」
「明らかに何かを潰した効果音だよな、それ。具体的には眼球とか
「いや、何かにちゅーした音。具体的には眼球とか
「な……、よせよ、こんなところで」

「どうして恥ずかし気に目を逸らす！？」

馬鹿な、今のは完全にボケてただろうが。眼球キスだぞ？ 軽い
気持ちで言つてみたのに、事態が予想外の方向に転がつている。言
葉のロンリーウォーキングだ。

いや、だが待てよ。実際その場面を想像するとなんかエロい気が
してきたぞ。頬を上気させた私が緊張してがちがちになつた親友の
眼鏡を優しく取り外す。そして彼の欲望に濁つた瞳に向かつてそつ
と瑞々しい唇を近付けて……。

やべ、何かこっちまで恥ずかしくなつてきた。

「あれ、舞菜？ 分かつてるとは思うが今のは演技だぞ。どうして
君が俯いて顔を赤くするんだ？」

「えつ……。わ、わかつてると、ばーか。変態眼鏡。眼ちゅーとか
ねーよ。」

「いや眼ちゅーは君が言つたんだけどね」

何を訳のわからないことを言つているんだ。品行方正の道を邁進
する私がそんなアブノーマルな発言するはずないだろう。本当に頭
がおかしいのだろうか。

しばし発言に関する責任の所在を政治家の「」とく押し付け合つた
後、親友の「眼ちゅーってアブノーマルじゃなくね？ むしろ至極
普通」という比類なき意見により議論はひとまずの終結を迎えた。
双方傷つくことのない、完璧な結論だつた。

「なあ、時間は有限なんだ。とりあえず公園を出ないか？」

彼が人生に疲れた中年男性のような声を上げた。互いの精神を削
りあうような無益な議論に疲弊してしまつたのだろう。

かくいう私も疲れきっている。何しろ先ほどの議論、勝つたところで異常性癖の親友という称号を手に入れるだけという事実に気づいてしまったのだ。

「そうだね。とりあえず御飯食べようか。まだひとつと早いけどお腹空いちゃった」

気づけば時刻は午前十一時。貴重な休日を早くも一時間近く浪費してしまった。

ひとまずくだらない会話で消費してしまったブドウ糖を供給すべく、一刻も早い食事が求められるところだと私は考察する。

親友も快活に頷いている。さすがの屁理屈眼鏡も私の正論には膝を折つたらしい。

「今何か失礼なこと思わなかつた?」

「ノン」

「そうでげすか」

「何その下衆つぽい喋り方!?!?」

「何つて島根県の方言だよ。ゲゲゲの女房見てないのか?」

「全島根県民に謝れ!」

正確には、そげですか。そうなんですか、という意味らしい。そういえばこの言葉も何か鳥賊つぽくておいしそうだと思つ。『げそじやなくてそげ、だからな』

「！」

「読心術だ」

「マジか。親友すげえ。」

「さあ、そろそろ行くでげす」

「いい加減にしとかないと島根県民に暗殺されるよ」

島根県は忍者発祥の地らしい。忍びがいるし鬼太郎もいるし、実はかなり高い実力を秘めた県なのではなかろうか。

「何か食べたいものある?」

「鳥賊と味噌豆腐」

「じゃあ歩きながらマックでも探そーか」

最近のマックはそんなものまで揃えてあるのか。さすが大手は一
一ズがわかっている。

私が発言した瞬間、親友が名状し難い表情を見せた気がするがき
つと氣のせいだろう。

本日は晴天。今日もいい日になりますように。

(後書き)

作者は島根県が大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329n/>

下らない会話 午前の部

2010年10月8日13時58分発行